

活動記録書

開催日： 令和7年2月14日(金) 天候 晴	開催テーマ： 鎌倉の祭と行事を楽しむ II
開催場所：金沢公会堂 多目的室	記入者：横山美智男
参加人数：会 員32名 準会員7名 ビジター1名 計40名	
<p>実施内容（実施の項目、方法、効果・成果、宿題 等）</p> <p>古都鎌倉では年間を通じて多くの祭りや行事を楽しむことができる。前回2月の続編として春から夏にかけての主な祭りや行事について、鎌倉ガイド協会、松林氏に講演いただいた。</p> <p>(1) 鎌倉まつりと「静の舞」 4月第2日曜日（要確認） 鎌倉まつりの初日に鶴岡八幡宮では「静の舞」が行われる。後白河法皇の策略にはまり、兄頼朝から追われる義経は吉野山に逃げ入る。愛妾静御前は、捕えられ鎌倉へ送られる。歌舞の名手、静は頼朝の命で、鶴岡八幡宮若宮の廻廊で舞ったと伝わる。義経への思慕をあからさまに表現する舞に、頼朝は大いに怒り不機嫌となる。その時、妻の政子は伊豆に流されていた頃の頼朝と自分との昔話をしてとりなし、その場をおさめる。静の舞は現在舞殿で行われているが、舞殿は当時まだ建立されていず、静が舞ったのは鶴岡若宮の廻廊と伝わる。</p> <p>(2) 草鹿式(くさじししき)（鎌倉宮）5月5日 鎌倉宮は明治天皇が創建した神社。「建武の新政」に寄与した護良親王を祀った。射術の稽古に草を束ねて鹿の形を作り作的にしたことが始まりといわれている。『吾妻鏡』によると、建久3年(1192)源実朝の誕生を記念して草鹿を行なったとある。当初の鹿には草に隠れる足は無かった。鎌倉宮では弓馬術礼法小笠原流「鎌倉菱友会」が、昭和57年以降は神事として古式ゆかしく執行している。</p> <p>(3) 菖蒲祭（鶴岡八幡宮）5月5日 5月5日の「端午の節句」は、「菖蒲の節句」ともいわれ、宮中では平安時代より盛んに催された節会の一つ。『吾妻鏡』には、鶴岡八幡宮において文治3年(1187)5月5日に初めて節句の神事が行われたことが記されている。現在の菖蒲祭がこれにあたり、無病息災と延命長寿を祈念して舞殿で神事が行われ雅楽が奉納される。日本を代表する雅楽団体「東京楽所」の演奏する雅楽は菖蒲祭の見どころである。</p> <p>(4) 五所神社例大祭（材木座）6月第2日曜日 明治41年(1908)に町内にあった八雲・三島・諏訪・金毘羅・視女八坂の五つの神社を合祀し、社名を五所神社と改称した。本社神輿は寛永19年(1642)の棟札がかかる神輿で、昔ながらの白丁姿の担ぎ手が、鎌倉「天王唄」に合わせて緩やかに蛇行しながら担ぐ。2基の神輿はいわゆるドッコイ神輿で、光明寺の門前で海へ入る。天王唄の由来は鎌倉時代の和賀筏舟唄と云われる。鶴岡八幡宮を造営の際、和賀江（現在の材木座海岸）に陸揚げされた用材は若宮大路を唄声勇ましく八幡宮境内に運び込まれた。これが今もなお愛唱されている。</p> <p>(5) 八雲神社の例大祭（大町）7月7日～14日の間の土曜から3日間 例大祭（夏祭り）は、鎌倉祇園会とよばれ永保年間に始まるという鎌倉で最も古い伝承を持つ、民の祭りである。神輿は4基、本殿で祭礼が行われた後に渡御が始まる。神幸の行列は、鎌倉囃子の一座に大太鼓、猿田彦が役員総代とともに随行する。その際、大宝寺で「神幸所祭」が行われるが、一番神輿を佐竹天王とする伝承に因むといわれている。夜、蝋燭を灯した提灯で飾られた神輿が渡御し、大町四ツ角では天王唄に合わせ、4基の神輿が一体化して練る「神輿ぶり」が見どころである。</p> <p>(6) 小動神社（腰越）・八坂神社（江の島）行合祭・天王祭 7月中旬の日曜日 天王祭は、江島神社の末社である八坂神社と小動神社合同で行われる全国的にも珍しい祭礼である。天王祭の見どころの一つである神輿海上渡御は、腰越にあった建速須佐之男命のお像を海中より拾い上げた故事を再現するもの。漁師が木臼・戸板の上にお像を安置し、真水で洗い清めたという故事の再現を目の当たりにすることができる。よくある「ミソギ・ハラエ」とは目的が異なる。双方の神輿は龍口寺山門前で「行合」し、小動神社に向かって電車を並行して進み小動神社下に到着後、祭典が取り行われる。終了すると、江の島一行は島に帰るが、小動神社の囃子は龍口寺前まで送って行事の全てが終る。</p>	
<p>参加者の状況・意見など</p> <p>静止画、動画をたくさん使い、わかりやすい説明だった。今回も好評、祭りに出かけるのが楽しみになったとの声が多くあった。</p>	
<p>次回の予定：</p> <p>・令和7年3月6日(木)10時 湘南モノレール湘南江ノ島駅5階ルーフテラス テーマ「梅を尋ねて新林公園」</p>	